

世界デザイン会議

ICSID '89 NAGOYA

基本構想

昭和62年 6月19日

世界デザイン会議開催準備委員会
基本構想専門委員会

目 次

はじめに

1. 開催の主旨	2
・背景と経過	
・主旨と目的	
・期待される効果	
・世界デザイン会議の位置づけ	
2. 内容構想計画	8
・全体計画概要	
・基本方針	
・基本テーマとその解題	
・会議形式と内容構成	
3. プロモーション計画	13
・基本方針	
4. 会議関連事業計画	15
・基本方針	
・概要と種類	
5. 推進体制について	17
・基本方針	

はじめに

この基本構想は、世界デザイン会議 (ICSID '89 NAGOYA) の開催に関する基本構想を、世界デザイン会議開催準備委員会（デザインイヤー推進準備会）より委嘱された基本構想専門委員会が、社団法人日本インダストリアルデザイナー協会内に設置された世界デザイン会議懇話会の協力を得て、まとめたものである。

基本構想専門委員会

座長 野口 瑠璃 (JIDA 会員)
委員 伊坂 正人 (JIDA 会員)
栄久庵 祥二 (社会学)
榎本 了壺 (クリエイティブ・ディレクター)
柏木 博 (デザイン評論)
篠原 宏 (JIDA 会員)
鈴木 博之 (建築史学)
竹原 あき子 (JIDA 会員)
月尾 嘉男 (都市工学)

協力 (社)日本インダストリアルデザイナー協会
世界デザイン会議懇話会

栄久庵 憲司 (担当理事)
吉岡 道隆 (座長)
木村 一男
篠原 宏
野口 瑠璃
諸星 和夫
八重樫 守
羽原 肅郎 (事務局)

(五十音順・敬称略)

1. 開催の主旨

・背景と経過

1985年（昭和60年）6月、JIDA 及び JIDPO は、愛知県、名古屋市、名古屋商工会議所より、来る1989年（昭和64年）に、市制100周年を迎える名古屋市の中心イベントのひとつとして第16回 ICSID 会議の名古屋開催誘致について打診を受けた。

これに対し両者は、早急に検討に入り現在の日本、さらには国際的視点等を考慮し、1989年の名古屋開催の重要な意義を認識するに至り、以後地元側とともに開催誘致を提案する ICSID ワシントン総会へむけて準備活動に入った。

同年8月の ICSID ワシントン会議・総会には、JIDA、JIDPO とともに地元側愛知県、名古屋市、名古屋商工会議所が代表を派遣した。現地においては、日本大使館などの協力を得て、8月22日のジャパンナイトの開催、誘致パンフレットの配布、各国代表との接触等総会における投票直前まで、活発な誘致活動を展開した。

8月26日、総会席上出席代表者による投票の結果、対抗候補地であるリュブリアーナ（ユーゴスラビア）を僅少差でおさえ、1989年の名古屋開催が決定した。

以後 JIDA 内部における準備体制の検討、翌年6月19日には、この事業を推進すべく、JIDA、JIDPO、愛知県、名古屋市、名古屋商工会議所等を構成団体としたデザインイヤー推進準備会（準備会は、1987年（昭和62年）4月1日から世界デザイン会議開催準備委員会に名称が変更された。）が設置され、この会より委託を受けた基本構想専門委員会による基本構想の検討を経て、今日に至っている。

その間、1986年10月に開かれた ICSID 理事会において（栄久庵セネット出席）、開催のための日本側の準備経過の報告を行うとともに、同年11月に開催された AMCOM においても報告し、意見を求めた。また、日本国内における各関連省庁、関連団体への協力要請などを努力中である。

・主旨と目的

求められる日本の国際的役割

日本が戦後40年を経て実現した産業経済のゆるぎない活力は、今日世界のひとしく認めるところである。それとともに、わが国をとりまく国際環境は、すでに先進国である日本が、新たに果たすべき役割を強く求めている。

地球をめぐる加速度的な情報化社会の現出によって、国際間の相互理解と協力はますます重要の度を高めている。狭い国土と乏しい資源という自然的条件のなかで日本は、伝統的感性の錬磨と知恵を尽くす努力によって、今日の成長を築き上げてきた。

まもなく迎える21世紀を前にして、国際社会に貢献できる日本の力は、その特質としての創造性であることに変わりはない。

デザインは、生活と文化、産業と技術、都市と環境など多彩な視点を持ち、そしてイデオロギーを超えた人間生活の基本課題である。

このときにあって、豊かな可能性に満ちたデザインを主題とした国際会議を日本で開催できることは、きわめて意義深いことといえよう。

変革期を迎えたデザインの潮流

科学技術の進歩や人々の生活意識の変化は、デザインによって具体的な生活場面に実現される。デザインの使命は、人々の生活と文化を理解し、快適な環境を創造することである。

豊かな社会の創出をめざす動きのなかで、今日のデザインの潮流は、急速に「物」の時代から「心」の表現の時代へと、大きく変化しようとしている。個性の尊重、多様化への対応、地域性の重視などにみられる傾向は、いずれも自由な人間の意志にもとづく、人間復活をめざす生活文化再編成への視点である。

物の豊かさは量で示された。心の豊かさは質において示されねばならない。確かに消費者は賢くなり、みずからの生活環境を創りだす動向をみせはじめている。産業もこれに対応すべく、さまざまの努力を重ねているが、双方をつなぐ価値観は多様な流動的状況を呈している。

情報化社会によってもたらされたデザインの激しい流行化現象は、大衆化社会での自己主張の表出として、位置づけることができるであろうが、同時に新しさや変化を求めようとする新たな型の

マス化現象とも言え、結果的にこの時代を表現するデザインのボキャブラリは、いたずらに饒舌になってきている。この状況を新しい文化を醸成する過渡的現象とみるか否かは興味深い討論議題であろうが、デザイン界は今や世界中で新たな「かたち」とその意味を求め、揺れ動いている。現在の日本もまた、例外ではない。

ハイタッチな「物」に人々は思いを寄せる一方で、次世代の感性はハイテクノロジーの世界に未知のイメージを求めようとする。

世界に共通したこの現象を通して、それぞれの国や地域は、いったいどのような人間復活をめざし、その生活環境を造形してゆこうとしているのだろうか。

このような変革期にあるデザインは、活動の輪をいっそう広げつつ、さまざまな角度から新たな生活と産業のインターフェイスの役割を、試みようとしている。

近年のこの動きはインダストリアルデザイン、建築、インテリア、グラフィック、クラフトなどのデザイン領域に加えてアパレル界、ニューメディアなどの動きの激しいデザイン分野において顕著な変化がおきている。

この世界デザイン会議は、そうしたデザインの潮流を一堂に集めて、新しい時代をひらくデザイン・ルネッサンスへの跳躍台となろうとする。

デザイン都市へ

都市はその高密度化によって、インフラストラクチャーの重層化が進み、その空間は人間不在の危機にさらされている。とりわけ日本は狭い国土の中で、人々の居住環境を創出する英知の集約を必要としている。

日常生活をとりまく消費材が、生産サイド支配の状況から消費サイドの優勢へと、サイクルが変わりつつあるように、都市もまた土木レベル、建築レベル、道具レベルの複合状況のなかで、経済性や社会性によってそのサイクルに変化が生じてきている。

生活文化の再編成は都市の活性化を促す。“いきいきとした都市づくり”それは近代文明を文化として成熟させることにほかならない。すぐれた文化の蓄積は、さらに未来を開く鍵をにぎることでもある。

都市はいま、デザインの時代を迎えた。住宅、道路、福祉、文化施設などに向けられていたいわゆる社会資本整備事業は、ようやく都市全体の景観や快適性に向けられるようになった。

ここに至って、都市づくりはもはや行政だけの課題ではなくなった。産業サイドからの協力、そして市民参加も必要となり、これにかかわる組織や人の輪は限りなく広がってゆくのである。

都市は生活と文化の総合体である。都市のデザインはあらゆるデザイン分野にわたってその専門性を駆使し、それぞれの知恵の柔軟な集約を必要とするだろう。都市のデザインへの参加は、それぞれの地域条件にもとづいて、さまざまな試行がくりひろげられるべきであろう。

「美しい都市」「いきいきとした都市」、人々の明日の生活像を描くことは、まさにデザイン都市への蘇生への志向であるといつてよい。

それゆえこの会議は、「明日のデザイン」にイメージをもつあらゆる分野からの発言と、異なる文化をもつさまざまな地域や国からの提言が期待される。そして日本からのその情報交換の輪が、世界に向かって広がってゆくことに、ことのほか意義がおかれる。

名古屋への期待

名古屋は日本における代表的な産業経済都市である。愛知県、名古屋市、名古屋商工会議所が世界デザイン会議を誘致した目的は第一に、生活と産業をむすぶ21世紀の街づくりに際して、デザインからの視点を重視したこと、第二に国際都市名古屋にふさわしい事業の展開をめざそうとしたことにあるといえよう。

1973年、日本ではじめての ICSID 会議は、現代文明と伝統文化のかかわりから「人の心と物の世界」をテーマに京都で開催された。京都は、世界の人々の日本の伝統文化への理解を高めるにふさわしく、成功を収めた。

1989年、京都会議から16年を経て、名古屋での会議は新たな国際環境の中で開かれる。世界はいま、高度成長を成し遂げ、国際社会の先導をつとめようとする日本の姿に注目している。

名古屋が優れた製品を通して世界に送るメッセージの背景として、デザイン都市への蘇生をめざし、新たな生活文化の形成のために、市民のデザイン意識の向上をはかろうとする努力が、世界デザイン会議を誘致した。そしてみずからデザイン都市のモデルとして名のりあげようとする姿勢は、必ずや高い評価を得るであろう。

名古屋はいま、市制100周年を期して、未来への夢と勇気を育む事業展開に熱い意欲をもやしている。そこに展開される記念事業のバックボーンを「デザイン都市」の視点で貫くことは、まことに時宜を得た選択といえよう。この意義をいっそう高めるために、この年がデザインイヤーとなることが要望されている。また、そのメイン事業としてデザインの流れ、拡がり、展望を示す「世界デザイン博覧会」が開催されることが決定しているが、この博覧会は名古屋をこえて全国に、さらに世界に、デザイン都市の意義とデザイン振興の輪を広げてゆくであろう。

以上のような会議関連事業展開の成功は、この会議のホストシティ名古屋の明日をひらく、記念すべき意義と効果をもたらすであろう。

・期待される効果

1973年のICSID京都会議は、欧米からは遠く離れ情報も少ないアジアの地で、はじめて行われた会議であった。だが今回は、デザイン情報の発信地としての強い注目をあびながらの開催であることを自覚しなければならない。国際環境はきびしく、ときにしたたかであることも覚悟せねばならない。しかしそれゆえにこの会議の成功は、新たに国際社会から求められている日本の姿勢を示すのに、絶好の機会として期待される。

生活と産業が新たな価値観によって再編されようとする時、これをむすぶデザイン界も、またかたちを変えて活動を前進させることになるだろう。一般市民にとってデザインは、さらに身近な生活教養となり、デザインを職能とするものにとっては、その能力を飛躍させる機会として有意義なものとなるだろう。広範な参加者による国際会議の情報集約性は、予測以上の成果をあげるだろう。

生活文化の再生と地域環境形成のために、地域行政は官民合同で新たな都市づくりの道を歩みだした。デザインはその鍵をにぎるものになるだろう。会議を通しての情報交流は、デザイン活動の場面をさまざまな局面に拡大させる契機となるだろう。

モデル“デザイン都市”をめざす名古屋の存在は、国内外で注目を集めることになり、その結果、名古屋のデザインに関する情報集約度は、著しくたかまるであろう。それは、名古屋にとって新たな資産であり、またこのような事業展開の試みは、他に多くの影響を与えるだろう。

さらにこの会議は、21世紀を生きる次世代にとって、新たな基点となるだろう。地球レベルでの文明の転換期にあたって、過去と未来のかけ橋となる若い世代への波及効果は、はかりしれない意味をもつと確信する。

・世界デザイン会議の位置づけ

本会議を準備するにあたり、基本方針に基づき、次ぎの諸事業との連携のもとに、相乗効果を上げるべく、以下のように位置づけ推進する。

(1) デザインイヤー '89 事業

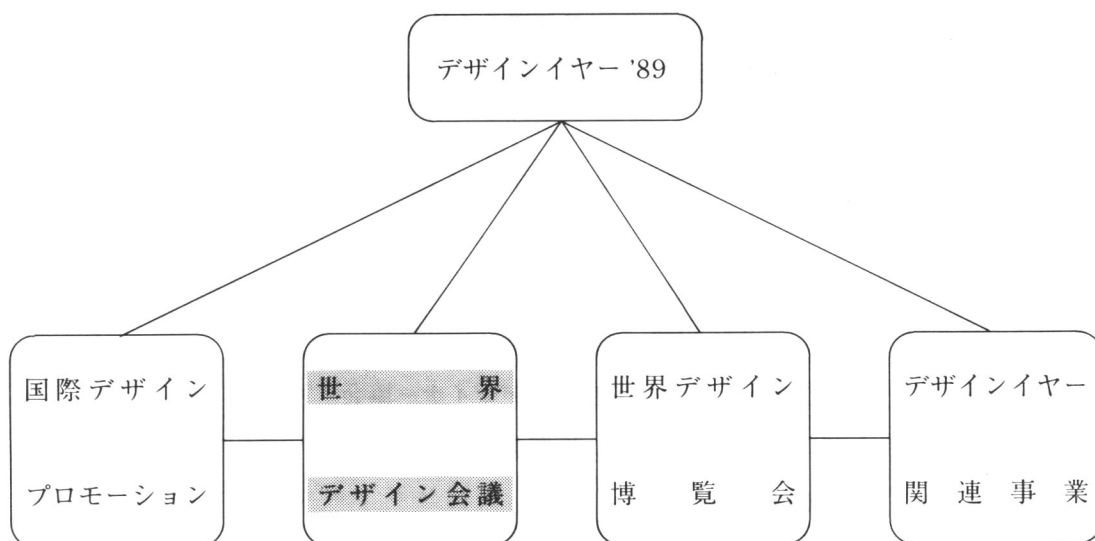
1989年に全国各地で実施されるデザインイヤーの基幹事業として本会議を位置づける。

(2) 世界デザイン博覧会事業

世界デザイン博覧会事業は、市制100周年事業と会議を結びつける重要な事業として位置づけられる。テーマ関連、開催会場の一致など、様々な側面での相乗効果が期待される。

(3) その他事業

国際デザインプロモーション、市制100周年事業等、その構想に基づき様々な関連事業へと展開される。



2. 内容構想計画

・会議計画概要

1. 会議名称
世界デザイン会議
ICSID '89 NAGOYA
2. 開催時期
1989年（昭和64年）10月18日～21日（会議）
10月22日・23日（総会）
3. 開催地
愛知県名古屋市
4. 形式
全体会議・分科会・ワークショップ・イベント
5. テーマ
かたちの新風景 ―情報化時代のデザイン―
Emerging Landscape : Order and Aesthetics in the Information Age
6. 関連事業
世界デザイン博覧会
7. 参加規模
3,000名（うち海外よりの参加者1,000名）
8. 主催
世界デザイン会議実行委員会
9. 推進母体
（社）日本インダストリアルデザイナー協会
（財）日本産業デザイン振興会
愛知県
名古屋市
名古屋商工会議所 等
10. 事業費概算
調整中

・基本方針

デザイン会議をより盛り上げ、成功に結びつけるべく、その内容構想を立案するにあたり、下記の5つをその基本方針とした。

- (1) 世界の中のアジア、アジアの中の日本、その日本の中心に位置し、価値ある情報を発信する都市としての名古屋で開催される意味を深く鑑み、テーマの統一性とその波及効果の徹底を図る。
- (2) デザインの地球的規模での啓蒙普及活動であることの認識に立ち、デザイナーをはじめとして、広く一般市民が参画できる内容を考慮する。
- (3) 新しいコンベンションシティのあり様を探るとともに、デザイン都市づくりの契機となるよう会議のデザイン、プログラムの立案にあたる。
- (4) 世界デザイン博覧会との相乗効果を十分考慮し、楽しく、わかりやすく、そして、その内容が、市民に新鮮な話題を提供するとともに、将来への文化資産として残るよう配慮する。
- (5) プロモーション活動・関連事業活動との関わりにおいて、会議の前後を含めて開催地及び産業界との協力が密接に行われるよう考慮する。

・基本テーマとその解題

かたちの新風景 ―情報化時代のデザイン―

Emerging Landscape : Order and Aesthetics in the Information Age

口紅から機関車まで、キャッシュカードからインテリジェントビルまで、私たちは、さまざまなモノに取り囲まれて生活している。そしてその背景では多くの人々がモノづくりに携わっている。そこでデザインは、これら無数のモノに美しいかたちを与えること、そのことを通じて、生活を新鮮化するという役割をもっている。

モノのかたちの基礎には一時代の社会がある。一個のプラスチック製のコップ、一台の電話機の造形にも、現代の仕組みと技術の到達点、人々の生活観が集約されている。この意味でモノのかたちは一つの総合、デザインによる総合である。経済の力、技術の力はデザインを通じてはじめてかたちを獲得し、家庭で、職場で、街角で、美しい風景を描き出すことができる。

いま、情報化時代を迎えて、これらモノのかたちの基礎が激しく揺らぎ始めた。経済の国際化、産業構造の転換、人口の高齢化に代表される社会構造の変化など、その良い例である。新技術は相次いで出現し、若い世代を中心に生活様式の変貌が著しい。過剰なまでのモノの世界。そこに渦巻く膨大なエネルギーを文化へ結晶させる仕事がデザインである。ありあまる可能性を現実にするうえで、今日ほどデザインの力を必要としている時代はない。

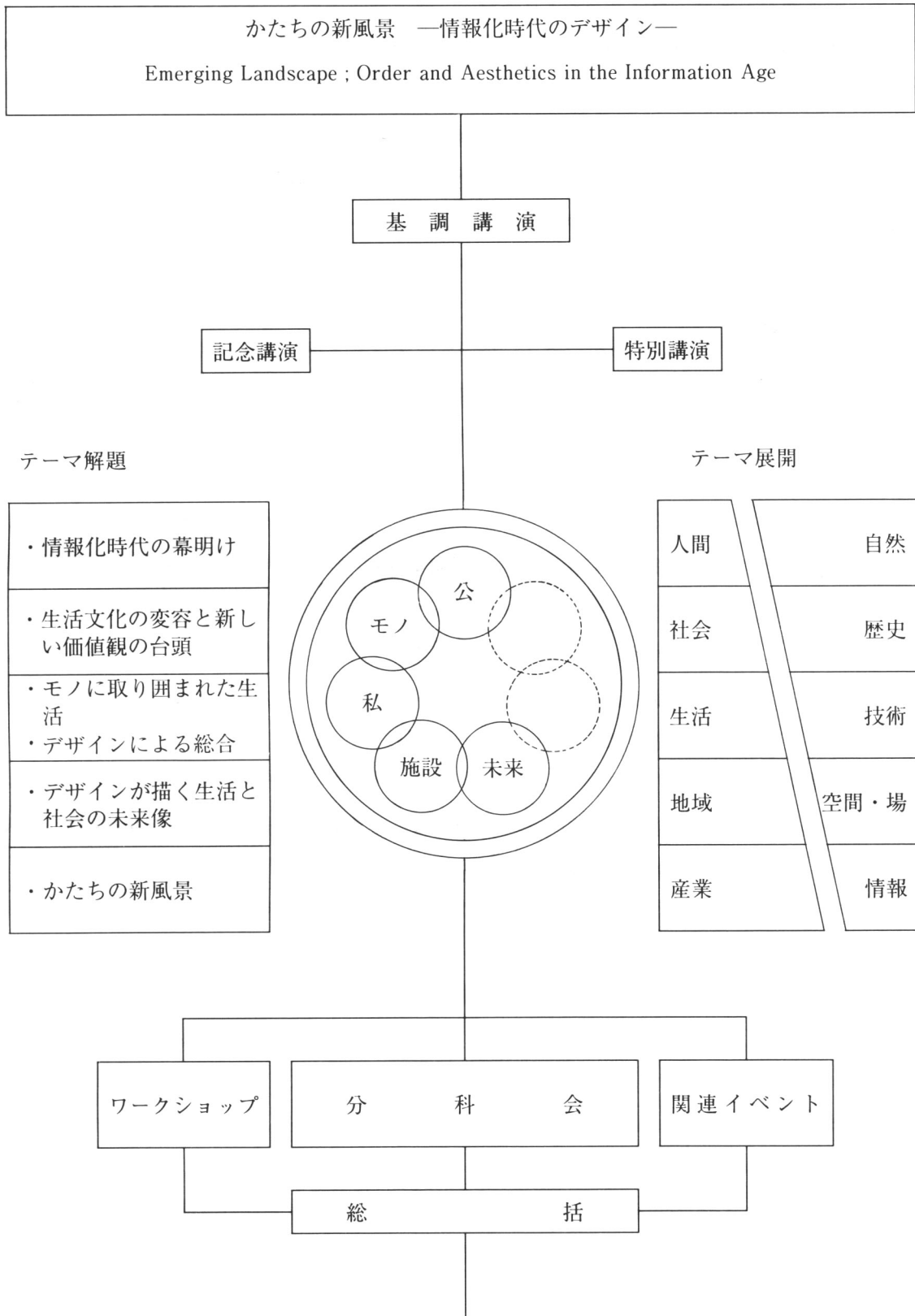
世界デザイン会議では、これからの「かたちの新風景」をテーマに、デザイナー、建築家、エンジニアのみならず、行政、経済、産業、都市づくりなど社会の各分野の人々、一般市民を集めて話し合われる。そこでは、モノの視覚的イメージやデザイン情報の交換にとどまらず、モノのかたちに表現されてくる生活と社会の未来像が同時に交換される。個々のモノのかたちを通して、それらが集まって作り上げている風景、全体としてのモノの文化に視点が置かれる。

「かたちの新風景」の萌芽は、名古屋に集まる人々の心の中にある。

会場をキャンパスとして、来るべき時代を創るデザインの可能性が多彩に描き出されること、そこに会議への大いなる期待がある。

テーマから全体構成への展開

メインテーマ



・ 会議形式と内容構成

会 議 形 式

会議開催の主旨と基本方針に基づき、従来の国際会議には見られない会議形式を試みるものとする。

ミュージアムプラザメインホール（仮称）を中心に、その他の会議場を立体的に利用する立体会議、各会場間の移動時間を利用する移動会議、さらにこれを通信回線等で結び相互に対話しながら会議を進行するネットワーク会議等の実現を検討する。

内 容 構 成

- (1) 記 念 講 演 世界の主導的頭脳を招き、会議の思想的指針を示す講演を行う。
- (2) 基 調 講 演 主題についての設問と、討議課題を設定する。
- (3) 特 別 講 演 テーマに沿った特別講演を行う。
- (4) 分 科 会 パネルディスカッション形式とする。パネリストは、会議前に各国より協会、または個人（グループを含む）の2種類の論文を公募し、論文審査により選定する。
- (5) ワークショップ 各主題に沿ったワークショップを行い、デザイナーのみならず、広く一般市民からの参加を求める。
- (6) 関連イベント

3. プロモーション計画

世界デザイン会議のプロモーション活動が第一に目標とするところは、日本及び世界のデザイナーやデザイン関係者に対して、本会議の計画や内容を的確に伝え、会議へのより多くの人々の参加を実現することにある。しかし、この会議がデザインという、社会や生活と結びついた行為を基盤として開かれるものであることを考えると、会議の意義や成果をより広く世の中に知らせてゆくことが重要である。それは単に会議それ自身の広報にとどまることなく、デザイン自身への認識を高めるものとしての意味をもっている。より効果的なプロモーション活動は、この会議の意義・成果を参加者や開催地だけにとどめることなく、日本はもとより世界のあらゆる人々にまで広く浸透させることができる。

一方、会議の計画を全世界にむけてプロモートすることは、開催地名古屋を世界に知らせることもである。それは、デザイン都市をめざす名古屋の先進的姿勢を世界に表明してゆくことでもある。

このように、プロモーション活動は、会議開催の意義と成果をより拡大させていく重要な鍵であり、広い視点からの綿密な計画によって、積極的な展開を図る必要がある。

また、願わくば、その活動が、デザインを通じた新しい動きの芽となり、後世に、世界デザイン会議の所産たる、様々な制度や施設、そしてシステムを残すことである。

・基本方針

- (1) 国内・国外を問わず広く人々に会議の意義を知らしめ、ホストシティ名古屋への関心を高める。
- (2) プロモーション活動は、単に会議参加者やデザイン専門領域にとどまらず、幅広く、産業、行政、教育、文化に関係する人々や、一般市民をも対象に活動を展開する。
- (3) デザイナー、世界デザイン博覧会等との連携を強化し、共同キャンペーンを行う等相乗的な効果をあげられるように活動を展開する。
- (4) 会議を成功に導くために、広くデザイナーや市民の動員を図るよう効果的な活動を行う。
- (5) 世界デザイン会議のプロモーション活動にふさわしく、デザイン的にみて、水準を超える質を目指す。会議の視覚アイデンティティを明確にし、高いレベルの MATERIAL を制作し、会議自体のイメージを高める。

(6) 会議関連事業を行うことは、プロモーション活動の一環であり、それはまた未来に向けての種蒔でもある。その結果を各界が協力して、新たな実を結ばせる方向に導いていくことは、将来に向けての大きな課題である。

4. 会議関連事業計画

・基本方針

会議は、デザインイヤーの基幹事業として、デザインに携わる者のみならず、広く、企業や一般市民がデザインに興味を抱き、デザインへの理解を深める機会となることが期待されている。世界デザイン会議がこの役割を全うするためには、その広報活動とともに、会議の諸関連事業を効果的に推し進めることが重要である。

本会議では、以上のような会議関連事業の意義を重視し、次の5つをその基本方針とする。

- (1) 会議テーマに沿った内容を持ち、諸事業が互いに有機的な関連を保ちつつ、会議開催までにその気運を盛り上げ、会議の成功を推進する役割を担う。
- (2) 会議を成功に導くため、デザイナーのみならず、企業や一般市民の間にも会議に対する関心を喚起し、動員計画に直接効果を及ぼすことが期待できるものとする。
- (3) 国際会議としての会議を成功させるために、国内のみならず海外にも波及効果を及ぼし、海外からの関心を集めるとともに、参加者の動員を図るものとする。
- (4) 会議が成功するか否かは、ホストシティである名古屋市の市民の協力を得られるかどうかにかかっているといても過言ではない。従って、会議開催までに名古屋市民の会議に対する理解を深め、会議への協力を促すものとする。
- (5) デザインイヤー事業の一環として、世界デザイン博覧会事業ならびに市制100周年記念事業との関連を持ち、相乗効果を図る。

・概要と種類

デザインイヤー'89事業を基軸として展開する。一方で、ICSID活動等をはじめとした国際デザイン運動と世界デザイン博覧会ならびに名古屋市制100周年記念事業との密接な連携をとりながら、関連事業を展開する。

事業の種類としては、下記の3種類を想定する。

- A. 世界デザイン会議実行委員会が、主催または共催するもの
- B. 世界デザイン会議実行委員会が、後援または協賛するもの
- C. その他、何らかの協力を行うもの

5. 推進体制について

・基本方針

質の高い会議を実現するためには、関係者の幅広い意見を聴取できるよう、組織化を経て、固めてゆくことが望ましい。また、実行組織については、参加者を集める上の組織化でもあるので、十分留意せねばならない。